

# 高森町歴史民俗資料館「時の駅」

## つくもがみ 「付喪神(キャラクター)図鑑2」



(R8. 6.4 現在)

## 「モノは百年以上たつと神になる」

当資料館には、古い民具や考古遺物がたくさん収蔵されています。中には百年以上前のモノもあります。わが国では百年以上たつとモノは「付喪神<sup>つくもがみ</sup>」という神になるといわれてきました。ケルト民族は収穫期を終えたハロウィンの日に化け物が現れるので、いたずらをされぬようお菓子などを配るとされています。わが国でも「百鬼夜行<sup>ひゃくきやこうえい</sup>絵巻」中に描かれるモノたちは鬼として描かれていますが、本来は長く使われてきたモノにたいして敬意と愛着を持って「神」扱いをするのが、わが国の先人たちの知恵だったといえましょう。モッタイナイ精神でモノを大切に扱ってきたことに思いを致し、モノの役割やその価値を再認識したいと考えました。

そこで、より付喪神様に愛着を持ってもらえるように「付喪神キャラクター」を設定し、付喪神様のイメージを絵で表し、その数も増えてきましたので、「付喪神キャラクター図鑑」を作ってみました。館内のあちこちにキャラクターたちがいますので、探しながらモノたちの声に耳をすませただけでもありがたいです。





**No.21** <sup>すざく</sup>朱雀: <sup>かじせん</sup>華耳仙 通称 (そのまま)「かじせん」

武陵地Ⅱ遺跡の発掘に伴い土中より現れた付喪神キャラクターである。本来は繩  
 文人の耳を飾るイヤリングとして活躍したが、<sup>はいき</sup>廃棄され土中で眠る間に湯が洞の温泉エ  
 ネルギーを<sup>きゅうしゅう</sup>吸収し、南方を守る朱雀神として出現した。<sup>きちようしよく</sup>基調色の朱色は<sup>しゆいろ</sup>耳飾に<sup>みみかざり</sup>時折  
<sup>ときおり</sup>見られる<sup>がんりょう</sup>顔料による。

羽に付随する耳飾には、様々なデザインがあるが、耳飾り研究の<sup>けんい</sup>権威である<sup>ももせながひで</sup>百瀬長秀  
 氏により<sup>せいりぶんるい</sup>整理分類され<sup>さいせいき</sup>最盛期の<sup>こそう</sup>古相から<sup>まっきてきようそう</sup>末期的様相まで<sup>まんべん</sup>万遍なくそろっているとされ  
 た。<sup>ほうこくしよ</sup>報告書の<sup>かんこう</sup>刊行を<sup>せつぼう</sup>切望されたが、<sup>ちよ</sup>いまだ緒についてはいない。

不死鳥のごときエネルギーにあふれてはいるが、その<sup>さが</sup>放出先を探しあぐねている。



**No.22** <sup>かみちようちん</sup> **神提灯:** <sup>みょうちん</sup> **妙珍** 通称 (そのまま) 「みょうちん」

お化けの世界では、スタンダードな<sup>ちようちん</sup>提灯ではあるが、付喪神の中でも“明るい神様”として有名である。<sup>ひぶくろ</sup>火袋の中に<sup>ろうそく</sup>蠟燭を立て、<sup>しんしゆくじざい</sup>伸縮自在に折りたためる持ち歩き用の<sup>とうかぐ</sup>灯火具の付喪神キャラクターである。

提灯は日本独自に<sup>はったつ</sup>発達したもので、古くは「桃灯」と書いた。室町時代にはその祖形ともいえる、竹かごに紙をはり<sup>まつやにろうそく</sup>松脂蠟燭を立てた「<sup>かごちようちん</sup>籠提灯」が使われていた。やがて竹ひごをらせん状に巻いて骨とし、紙をはって上下に<sup>くるわ</sup>曲輪をつけた伸縮自在の提灯が作られ、江戸時代になると和ろうそくの生産が確立されたこともあり、様々な形の提灯が広く一般に<sup>ふきゅう</sup>普及し、仲間も増えた。

当館の付喪神「<sup>みょうちん</sup>妙珍」は、第2展示室の「照明用具」のコーナーに<sup>ちんざ</sup>鎮座するが、<sup>たかはりちようちん</sup>高張提灯や<sup>おだわらちようちん</sup>小田原提灯、ぶら提灯を仲間時々ぼーと光って見学客を驚かすので、「ナイトミュージアム」で横切る時は、注意した方がよい。



**No.23** <sup>くわうし</sup> 鍬牛 通称「ぎゅうちゃん」

牛馬による犁耕（「すき」による耕作）が普及してからも、牛馬を入れられない湿地地带では、鍬による耕作が行われた。この作業には適した形の備中鍬や風呂鍬を用いた。

現在の農業は機械化され、トラクターなどを中心に行われるが、田の畝を立てたり、学校の花壇や畑地を耕す時に鍬が使われることもある。

鍬牛（ぎゅうちゃん）は、あまり使われなくなり資料館に陳列された鍬・鋤たちの中から生まれた付喪神キャラクターである。

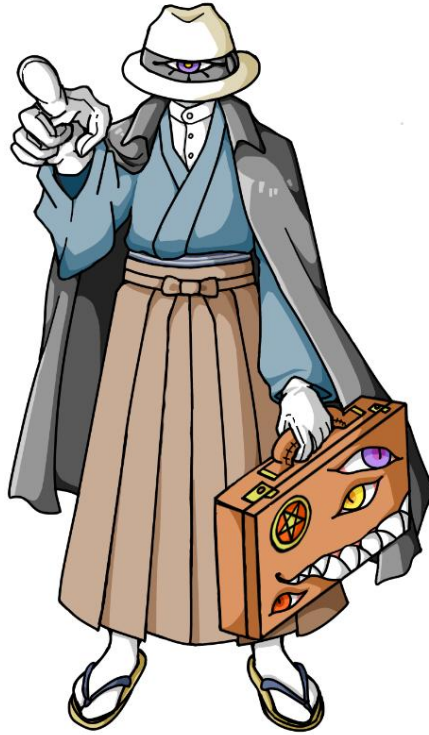
祖先の登場は農耕が本格的に行われた弥生時代（約2000年前）にさかのぼるが、古墳時代（4世紀～）に現れた風呂鍬や江戸時代中頃（19世紀～）に普及した備中鍬などと共にかつての「栄光」を語り合っているのだろうか。



## No.24 怪盗クロック 通称「クロック」

そもそもは、時を測る器機である。日本に西洋の機械時計がもたらされたのは、天文20年(1551)スペインの宣教師フランシスコ・ザビエルによってと言われる。やがてその技術が近畿地方に伝わり、日本の時刻制度に合わせた独特の和時計が考案された。日本の和時計は1年中1時間の長さが同じモノではなく、四季の変化によって変える不定時法に則して時を刻むようにしたもので、時刻盤も十二支が表示されていた(0時が子)。

当館の和時計から生まれた怪盗クロックは、時を自由に操り、他の時計に変身して人の心を盗む怪盗である。ナイトミュージアムに参加した子どもたちはご用心!天敵はパナマ帽がトレードマークの時屋小五郎である。



No.25 <sup>ときやこころう</sup>時屋小五郎 通称「小五郎」

資料館第2展示室の衣装コーナーから生まれた付喪神キャラクターである。「怪盗クロック」の悪事を制するべく、第2展示室の入り口側で待機する。

トレードマークの「パナマ帽」の下の顔は誰も見たことが無く、小五郎そのものが謎の付喪神であるが、「怪盗クロック」が起こす悪事を止めようという想いは本物である。

衣服は、明治から大正期にかけて流行した服装で、被る「パナマ帽」は、夏目漱石や森鷗外、北原白秋など多数の文学や詩、果ては作者の手紙にも登場する。特に夏目漱石は、「猫（吾輩は猫である）」を書いた原稿料をもらったので、さっそくパナマ帽を買って大得意で被っていたら…」という手紙を書いているほどで、当時の人気うかがえる。

携帯するトランクには怪盗クロックの悪事を阻む道具が詰まっている。



**No.26** さおばかりざる 竿秤猿 通称「天ちゃん」

竿秤とは物の重さを量る「はかり」である。天から伸びる鬼の手（天の鬼の手）に握られた竿秤にぶら下がるのは、<sup>おもり</sup> 鍾（<sup>ぶんどう</sup> 分銅）の付喪神猿「天ちゃん」である。鬼の手に握られたひもを支点として、先端の皿に量るものを、他の側に鍾の分銅を吊り下げ、鍾を移動させて水平を保つ位置の目盛りを読む。

高森名産の果物などを皿に入れ、その重さや価値をバランスを取りながらはかるのが得意である。「天ちゃん」は高森の未来を予測する能力も秘めている。

牛牧と大島山の境に「鬼の手公園」「鬼の手大橋」があるが、天の鬼の手との関係は不明である。



No.27 おにかわら や ね ぼんにん 鬼瓦屋根番人 通称「ヤネバーン」

「時の駅応援隊員」が見つけてくれた付喪神キャラクターである。

鬼瓦とは、かわら や ね おおむね くだりむね ほし かざりがわら瓦屋根の大棟や降棟の端に置く飾瓦で、魔よけの意味を持つ。かまくらじだい鎌倉時代に角のある鬼面をかたどったものがつくられるようになると、一般に「鬼瓦」と言われるようになった。江戸時代になると火災除けの意味をもつ水みづの字や縁起えんぎの良い宝珠ほうじゆ、雲をかたどるものなど様々なデザインの瓦がつけられ、それもみな鬼瓦と呼ばれてきた。

当館の鬼瓦は、昭和4年(1929)に山吹駒場の会所新築の際、座光寺の瓦職人：くろかわ黒川まさいちろう政一郎氏が制作したもので、昭和58年(1983)改築の折、当館にきたく寄託された。

「ヤネバーン」は“屋根の番人”という意味でつけられた名前であるが、制作されてからほぼ百年たとうとしており、鬼としてより付喪神として見出されたのは、嬉しい事であろう。時の駅応援隊の活躍に今後も期待したい。



## No.28 音楽化 イノシー 通称「イノシー」

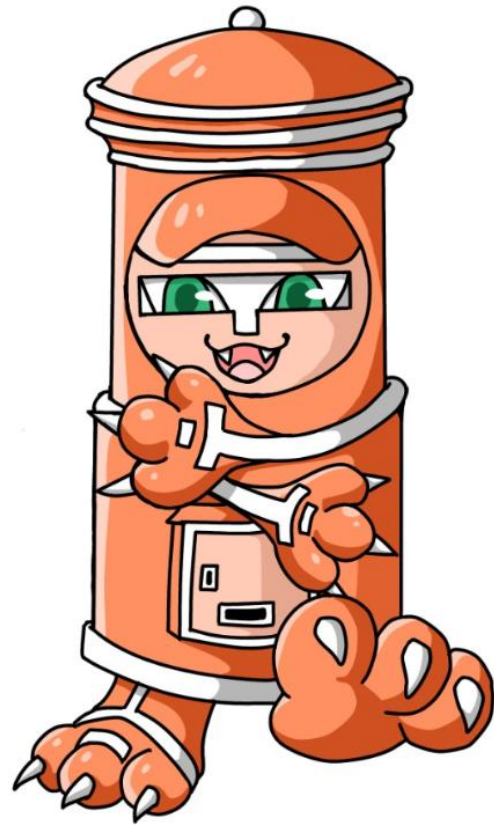
資料館に通いつめる小学生「横獅子トリオ」が見つめてくれた「篠笛」の付喪神キャラクターである。音楽好きな化けモノという意味で「音楽化・イノシー」を名乗る。

中国から「雅楽」の楽器として渡ってきた竜笛などの横笛が、独自の進化を遂げ篠笛になっていった。

篠笛の材料の竹は、湿気が多い温帯・熱帯気候を好むので、大陸的気候のヨーロッパ等では自然に自生しにくく、竹製の笛は西洋ではあまり見かけない。

当館に居つくようになったのは、徳川四天王の一人、井伊直政の父親「井伊直親」が「亀之丞」と呼ばれていた幼少期、駿河の今川義元に命を狙われ市田郷松源寺にかくまわれていた。その際、使ったとされる「青葉の笛」のレプリカを当館が預かったのがきっかけである。

青葉の笛からは、寂しい音色が流れたかもしれないが、イノシーは陽気な曲も得意である。



No.29 <sup>ゆうびん</sup>郵便ポスト ぼすとん 通称「ぼすとん」

資料館に通う双子の「Y 姉弟」によって見出された付喪神キャラクターである。

1871 年（明治 4）<sup>ゆうびんせいど</sup>郵便制度の発足とともにポストの設置が決まった。最初は黒塗りの四角い木箱で、前面には「<sup>ゆうびんやくしよ</sup>郵便役所」と書かれており、<sup>とびら</sup>扉には<sup>じょうまえ</sup>錠前がついていた。赤いポストの登場は、1901 年（明治 34）現在の丸型ポストの原型となる「<sup>ゆうびんさしだしぼこ</sup>郵便差出箱一号」からである。

当館の丸型郵便ポストは、1980 年（昭和 55）に<sup>かみいちだゆうびんきょく</sup>上市田郵便局から<sup>きぞう</sup>寄贈いただいた。

「Y 姉弟」は、姉弟で付喪神キャラクターを考えてくれて、お父さんも協力的で有難い。



No.30 <sup>おだわらちょうちん</sup> 小田原提灯 **きょうちん** 通称「きょうちん」

これも資料館に通う双子の「Y 姉弟」によって見出された付喪神キャラクターである。

「小田原提灯」は、今は神奈川県小田原市の<sup>でんとうこうげいひん</sup>伝統工芸品であるが、<sup>どうたい</sup>胴体を<sup>じゃぼら</sup>蛇腹のように折りたたんで<sup>ふた</sup>蓋に<sup>しゅうのう</sup>収納できるため、江戸時代は<sup>とうかいどう</sup>東海道を旅する人々の間で<sup>ちょうほう</sup>重宝された。<sup>どうよう</sup>童謡「お猿のかごや」の歌詞に<sup>とうじょう</sup>登場することでも広く知られている。

「<sup>みょうちん</sup>妙珍」・「きょうちん」とくれば、「ぶら提灯」と組んで「明るい」コントでもさせたいところである。



### No.31 <sup>まんごくとお</sup>万石通し 万石石高 通称「万石通次郎」

「時の駅応援隊員」が見つけてくれた付喪神様キャラクターである。

「万石通し」は「千石通し」ともいい、江戸時代17世紀（1600年代）後半頃から日本で広く使われるようになった。米や麦などの<sup>こくりゅう</sup>穀粒を<sup>せんべつ</sup>選別・ふるい分けるための<sup>でんとう</sup>伝統的な農具である。<sup>のうぐ</sup>傾斜させて立てかけた<sup>けいしゃ</sup>木枠に、<sup>きわく</sup>網目の異なる<sup>あみめ</sup>金網を<sup>ふくすうだん</sup>複数段（3～4段）重ねて取りつけた<sup>こうぞう</sup>構造をしている。それまでの手作業に比べて一度に大量の選別が可能になったため、「万石（大量）のコメを選別できる」という意味を込めてその名がついた。「<sup>せんぼこ</sup>千歯抜き」や「<sup>とうみ</sup>唐箕」などとともに、江戸時代の農業生産力を大きく引き上げた。

当館の万石通しは、1979年（昭和54）山吹駒場の小平氏から<sup>きぞう</sup>寄贈された。



## No.32 タイプライター レミトン丸 通称「レミトン丸」

資料館に通う「I親子」によって見出された。

アメリカのレミントン社製のタイプライターが元の付喪神キャラクターである。タイプライターとは紙に文字を打ち書面にする機械であり、パソコンのキーボードの先祖ともいえる。

レミントン社は、銃の製造から始まり、タイプライター部門が独立してレミントンランド社としてタイプライターのトップ企業となった。

当館のタイプライターは、1963年（昭和38）飯田長姫高校から寄贈されたもので、付喪神としては新顔の部類に入る。